

経営理念の承継



富田 英雄
(株式会社富田製作所)
代表取締役社長

弊社の工場入口には、「良質な製品を通じて社会に奉仕」と「厚板精密板金、世界一をめざし」の経営理念の第1条と第5条を略した大きな看板（長さ6m×幅1m×2枚）が掲げられています。「奉仕」の文字の下にキノコの胞子のイラストや「めざし」の下には3匹の目刺しのイラストが描かれ、皆様から思わず「プッ」とにこやかな笑顔を頂いています。

数年前の大きな台風で、「厚板精密板」までの上半分が飛ばされ、「金、世界一をめざし」の看板になってしまった事もあり、とても恥ずかしい思いをしましたが、今では笑い話です。

弊社は、「厚板精密板金、世界一をめざし」を合言葉に長尺ワンフレームでは世界最大の16,000トプレス^トを武器に、世界一の東京スカイツリーを支える板厚100mm×直径Φ2,300×重さ15トンの一番厚く、大きく、重い鋼管で地下から地上150mまでの鼎柱を作り、また東京から直接海外へ行ける様に羽田空港第4滑走路の棧橋杭を作りました。さらに、東京駅八重洲口の長さ230mの大屋根であるグランルーフのデザイン重視の柱や梁などの部材を作り、昨年には、全国大学駅伝のスタート位置にある出雲大社の「勢溜の大鳥居^{せいだまり}」など、他社では難しい良質な製品を作り、皆様から心より喜ばれ、社会に貢献できることを目的にしたモノづくりの会社です。

創業者である富田大八郎は、能登半島の最先端にある石川県珠洲市の貧しい家の末っ子として大正8年に生まれ、16歳で東京都大田区大森の鍛冶屋に丁稚奉公に入り、その後太平洋戦争に志願し、当時世界一、世界初の羽を折りたたみ、3機の戦闘機を搭載した水中空母と呼ばれたイ号401潜水艦に整備兵として乗艦し、ウルシー環礁に停泊中の敵機動部隊の空母を奇襲作戦で攻撃間近の昭和20年8月15日に太平洋上で終戦を迎えました。終戦後、丁稚奉公先の大田区に戻り、結婚し、2人の子供が出来、昭和26年に家族4人が食べて行く為独立し、葛飾区立石に4.5畳と6畳の二間に6人家族が暮らす妻の実家に4人家族が押し掛け、隣の空き地を拝借し、拾った命とハンマー1本で創業を始めた会社です。四男の私が生まれる昭和31年に法人として葛飾区四つ木で設立し、毎日、朝礼で「板金世界一を目指す」と言い、「三丁目の夕日」の様に東京タワーが段々高くなるのを見ながら、皆、夢を持って働いていました。

昭和37年にスチール事務機の親会社の近くに松戸工場を作り、さらに昭和43年にコマツフォークリフト（現コマツ）が栃木県小山市に移転する為、小山に近い茨城県古河市に商工中金から融資を頂き、竣工する事が出来ました。

しかし、オイルショックなど数々の不景気に会い、1社頼みの下請では生きて行けないと、得意なプレス板金技術で不特定なお客様の仕事が貰える様に1,000トプレスを導入し、「世界一になるには、世界一の道具が必要」と、全ての個人財産を抵当に入れ、昭和58年に1万トプレスを導入しました。更に平成3年にバブル崩壊により土地や設備が安くなったのを切っ掛けに茨城県下妻市に20億円の予算で「最後の花道として社会に貢献できる工場を作れ」と言われ、平成6年4月竣工予定でしたが、その2週間前に他界したため、長男が2代目を継ぎました。「もうすぐ景気が良くなる」と父に言われて工場を作りましたが、まさかその後失われた20年になるとは夢にも思いませんでした。厳しい環境の中、新たな技術開発や新たな多くのお客様に恵まれ、20年が過ぎ、今度は、五男の3代目社長が「名実ともに世界一の16,000トプレスの工場に30億円をかける」と言い、平成26年に竣工しましたが、1年9か月後に病気で亡くなりました。しかし、「ぶれないモノサシ」である経営理念のお陰で従業員やお客様との信頼関係が保たれ、昨年、5期ぶりに黒字化出来ました。

経営理念とは、「何の為の企業なのか」、「誰の為の企業なのか」、「その事業を持って世の中の為にどのように貢献して行くのか」などの存在理由がミッションであり、それを具体的な期日や方法でビジョンを示し、前向きなパッションで挑戦し、社会に価値あるバリューを積み上げていく事で企業の永続性が左右される基礎となる「ぶれないモノサシ」なのであります。

弊社の経営理念は、創業者の富田大八郎が、尊敬する明治生まれの海軍少将であった栗原悦蔵様に御教えを受けて作り上げました。一見、古めかしい言葉の使い方や言葉の意味が平安時代からの「敬神崇祖^{けいしんすうそ}」の考え方である「拝の精神」が基本にあります。

「拝」とは、「慎みの心、敬いの心、感謝の心を持って、真心を尽くす」考え方です。今ではあまり使われなくなった言葉ですが、名前を呼ばれて返事をする「ハイ」は、この「拝」の字であり、手紙の初めに書かれる「拝啓」や神社の「参拝」など、知らず、知らず、今でも使われていますが、近年、その意味を知らない人が多くなっています。

「拝の心が人間関係に対して和となり、拝の心が仕事に於いては奉仕の行いとなる」と言う考え方です。「和」とは、「①人間関係を保つ潤滑剤や触媒とでも言うべき、なごやかな和、② $1 \times 1 = 1$ と言う組織メンバーが一体感を認める和合の和、③ $1 + 1 = 2$ と言う協力の和」であり、なごやか、一体感、協調の和であります。そもそも会社組織とは、我々の体の機能と同じで、「食事の時は、無意識に歯が胃を助け、胃が腸を助ける。また、暗がりで見えない時には、無意識に聞き耳や、手すり足すりで、危険から身を守ります」。この様に、会社の各部や課は、それぞれ専門化、分業化、標準化を全員が和を持って一体感を認め合う和合の集合体であると言う考え方です。

また「奉仕」とは、「仕事に真心を捧げ全力を尽くしているか」であり、ボランティアやサービスとは違います。そもそも奉仕とは、文字通り「仕え奉る」であり、仕事とは、「仕え事」と言う意味であり、「人はその仕事を通じて己に仕え、社会に仕え、国家に仕え、全人類に仕え、天に仕える」と言う考え方です。今は、経済至上主義の中、お金の仕えるようになり、ミーイズムの利益追求となっていますが、そこに「御」を付けて、社会からの「御利益」や「御知恵拝借」で「俺が俺がの我を捨てて、お陰お陰の下で生きる」と考えて行ければ、人の生き方もモノの作り方も随分変わって来ると考えています。

この様に、「良質な心とモノづくりにより、社会に仕え奉る」事が、富田製作所の経営理念であり、会社の存在意義を承継していく事が、会社の存続に繋がると考えています。